



安野光雅展 関連イベント ワークショップ・コーナー「旅の風景を描こう！」

特別展「旅の風景 安野光雅 ヨーロッパ周遊旅行」の会期中、子どもから大人までを対象に、展覧会にちなんだワークショップを1階ロビーで実施しました(無料・当日自由参加)。本展は、画家、絵本作家、装丁家として創作活動を行っている安野光雅の作品の中から、ヨーロッパを旅して描いた水彩の風景画に焦点を当てた展覧会です。

ワークショップの内容は、「旅の風景を描こう!」と題し、風景の写真をしながら「旅の風景」を描くというものです。安野氏の制作のスタンスにならない、単なる写生の強制では

なく、参加者自らが発見し想像力を働かせることをコンセプトにしました。

素材は、約50種類のヨーロッパの風景写真(著作権フリー)のカラーコピー、画材は、展覧会に合わせて画用紙、鉛筆、水彩絵具、毛筆を用意し、他に色鉛筆、カラーペン、クレヨンなども揃えました。方法は、参加者が自分で写真を選び、これをもとに想像を加えながら自由に描くことを、プリントやスタッフの説明で促しました。また持ち帰った後の活用のため、描いた風景画でオリジナルカレンダーを作るオプションもつけました。

8月1日～23日の20日間で800人以上の

来館者が参加し、アンケートでは「展覧会の内容と響き合う企画」、「自由な発想で描ける企画は継続してほしい」等の意見をいただきました。ワークショップでは、対話ができる空間で制作を楽しむ体験を通じ、能動的に美術に親しみ、展示作品や作家への理解を深めることを主なねらいとしております。今後もファミリーや幅広い層の方々が参加しやすい夏休みの時期に実施していく予定です。

【展覧会データ】
 展覧会名 | 旅の風景 安野光雅 ヨーロッパ周遊旅行
 会 期 | 2015年7月7日(火)～8月23日(日)
 主 催 | 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 朝日新聞社
 協 賛 | 損保ジャパン日本興亜
 特別協力 | 津和野町立安野光雅美術館
 企画協力 | アートキッチン

FACE 2016 グランプリ 遠藤美香 Mika Endo 《水仙》



- 1984年生まれ 静岡県在住 日本版画協会会員
- 2007年 日本大学藝術学部美術学科版画専攻卒業 第4回棟方記念版画大賞展 棟方記念大賞
- 2008年 第14回鹿沼市立川上澄生美術館木版画大賞展 準大賞(2014年大賞) 第76回版画協会展 山口源新人賞(2011年最優秀準会員賞)
- 2009年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画版画領域修士 アートアワードトーキョー丸の内2009 第1回青木繁記念大賞西日本美術展 石橋財団石橋美術館賞
- 2010年 第28回上野の森美術館大賞展 入選
- 2011年 シェル美術賞展2011 本江邦夫審査員奨励賞
- 2012年 「公募団体ベストセレクション」(東京都美術館)
- 2013年 FACE展2013 入選(2014年) 個展「新世代への視点2013」(ギャラリーなつか・東京)
- 2015年 個展(鹿沼市立川上澄生美術館)

2013年と2014年の「FACE展」入選を経て、今回見事グランプリを受賞した遠藤美香は、一貫して木版画の可能性を追求しています。「構図に重きを置き、作者の感情や記憶、思い入れを表さない」と語る遠藤は、網戸や畳などの幾何学的図柄と無表情の女性像を合わせた作品を出品していました。今回の受賞作《水仙》は、画面全体に拡がる水仙の花の中で、膝を折って佇む花柄のワンピースを着た女性の後姿を捉えています。遠近法を

駆使しながら花を細かく彫り込み、その花園の中に女性が溶け込むようなイメージとなっています。「白と黒が明瞭に表れているものほど、その色の美しさを感じる」と説く遠藤の木版画の世界は、見る者の網膜の中で色彩豊かな花を咲かせることでしょう。日本の伝統芸術でもある木版画技法の研鑽を積み、新たな感性で木版画の世界を切り開いている遠藤の力強い作品は、今後益々注目されていくことでしょう。



《水仙》2015年 木版画 182×91cm

東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館

当館の活動方針を汲んで寄託いただいた絵画2点の紹介をはじめ、2015年に実施した活動をご報告します。

パリの風景を詩情豊かに描いたモーリス・ユトリロ(1883年～1955年)は、日本で圧倒的な人気を誇る画家のひとりといえるでしょう。しかし、その母であるスザンヌ・ヴァラドン(1865年～1938年)もまた、画家として活躍していたことはあまり知られていないかも知れません。ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ、ピエール＝オーギュスト・ルノワール、エドガー・ドガといった巨匠たちからその美貌と才能を認められ、トゥールーズ＝ロートレックや音楽家エリック・サティと恋愛関係を結び、父親の分からない息子を出産し、21歳年下の息子の友人と再婚したヴァラドンは、その自由奔放な生き様に注目されがちですが、作品を見ると、確かなデッサン力に培われていること、当時の女流画家としては珍しく裸婦像を得意としたことなど、ヴァラドンが才能と個性にあ

ユトリロとヴァラドン 母と子の物語 —スザンヌ・ヴァラドン生誕150年—



スザンヌ・ヴァラドン《裸婦の立像と猫》1919年 油彩・キャンヴァス 61×50cm Collection particulière, France

ふれた画家であったことがわかります。本展覧会では油彩を中心にユトリロの作品41点、そのルーツともいえるヴァラドンの作品40点をあわせて展示し、母と子の関係を交えながらふたりの作品をご紹介します。

【展覧会データ】
 展覧会名 | ユトリロとヴァラドン 母と子の物語 —スザンヌ・ヴァラドン生誕150年—
 会 期 | 2015年4月18日(土)～6月28日(日)
 主 催 | 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 日本経済新聞社
 協 賛 | 損保ジャパン日本興亜
 後 援 | 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本
 協 力 | 日本航空
 企画協力 | IS ART INC.

モンマルトルの画家として知られているユトリロですが、この作品が描かれた時期はモンマルトルを離れ、ボージョレー地方のサン＝ベルナル

でアルコール依存症の療養生活を送っていました。おそらくこの作品は、その頃描かれた他の作品同様、実際の景色ではなく絵はがきや自分が過去に描いた作品などを見ながら描いたものと考えられます。まっすぐな線、明るい煉瓦色、往来を行く人物など、ユトリロの「色彩の時代」の特徴が見られます。

新収蔵品紹介

元の画面が木枠の幅だけ折り曲げられており、左上にはサインと、「1929」と読める書き込みが。1929年は東郷が32歳の時、フランスから帰国した翌年にあたります。裏に貼られた紙片には「世田谷山崎一四〇五 東郷青児サーカス」とあり『日本美術年鑑』(1929年)の東郷の住所も「府下世田谷町山崎



モーリス・ユトリロ《モンマルトルのサクレ＝クール寺院》Maurice UTRILLO 《Sacre-Coeur de Montrartre》1925年 油彩・キャンヴァス 53×60cm © ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2015 E1921 © Hélène Bruneau 2016



東郷青児《サーカス》1929年 油彩・キャンヴァス 71×51.5cm

1405」でした。山崎は世田谷区梅丘の一部の旧地名です。制作当時に個人が入手したという貴重な一点です。



1 2 3 4

絵画のゆくえ 2016 FACE受賞作家展 受賞作家たちの活躍に迫る

年齢・所属を問わない平面作品のコンペとして毎年開催している「FACE展」は、その年の俊英たちを発掘し顕彰する展覧会です。10数

倍の関門を通過した入選作品の中から更に厳選された作品が「グランプリ」、「優秀賞」に輝きます。本展は受賞作家たち12名の新作・近作95点を紹介し、3年間の大き

な絵画の趨勢を看取できるものです。

12名の内訳は、油彩7名、日本画3名、版画1名、コラージュ1名で、男性7名、女性5名です。油彩・アクリル作品のグランプリはまだ登場してませんが、技法を問わず、「FACE展」受賞作家たちのその後の活躍には目覚ましいものがあります。

「FACE展」審査基準は「真に力があり将来国際的にも通用する可能性を秘めた作品」であり、現代美術展を隈無く見て回っている審査員たちの鑑識眼の確かさが、展覧会の質の維持に寄与しています。受賞・入選作家たちの今後の活躍は続くでしょう。

【展覧会データ】
 展覧会名 | 絵画のゆくえ 2016 FACE受賞作家展
 The Way of Paintings
 —FACE Award Winners
 会 期 | 2016年1月9日(土)～2月14日(日)
 主 催 | 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 読売新聞社
 協 賛 | 損保ジャパン日本興亜



5



7



6

- 1 — 西村有《行方》2015年 油彩・キャンヴァス 181.8×227.3cm
- 2 — 村上早《息もできない》2015年 銅版・モンパルキャンソン・雁皮紙 90×103cm
- 3 — 田中千智《生きのびる人》2015年 油彩・アクリル・キャンヴァス 130.3×194cm
- 4 — 眞田勇《The boundary》2015年 油彩・アクリル・綿布 130×162cm
- 5 — 和田和子《すれ違う散策風景(温室にて)》2015年 油彩・キャンヴァス・木枠 194×454cm(4枚組)
- 6 — 堤康将《燃えるゴミの日》2015年 岩絵具・アクリル・銀箔・和紙 130×300cm
- 7 — 大橋麻里子《Springtime》2015年 油彩・アクリル・クレパス・キャンヴァス 116.7×72.7cm
- 8 — 二川和之《寸差二態》2015年 墨・金属箔・金属泥・麻紙 117×108cm
- 9 — 永原トミヒロ《UNTITLED 16-02》2015年 油彩・キャンヴァス 227.3×181.8cm
- 10 — 宮里絃規《FLY》2015年 ミクストメディア 194×162cm
- 11 — 近藤オリガ《開眼》2015年 油彩・キャンヴァス 112×194cm
- 12 — 川島優《Domain》2015年 墨・岩絵具・銀箔・銅粉・麻紙 112×194cm



8



9



10



11



12

もうひとつの輝き 最後の印象派 1900-20's Paris

20世紀幕開きのパリ。「ベルエポック」と呼ばれた最も華やかな時代に、印象主義や新印象主義、象徴主義といった前世紀の芸術スタイルを受け継ぎながら、親しみやすく甘美な作品を描いた画家たちがいました。「もうひとつの輝き 最後の印象派 1900-20's Paris」は、こうした画家たちが所属していた芸術グループ「ソシエテ・ヌーヴェル(画家彫刻家新協会: La Société Nouvelle des Peintres et Sculpteurs)」の芸術家たちとその作品を紹介した展覧会です。

ソシエテ・ヌーヴェルは、当時最も権威のある展覧会だった官制サロンやル・サロン、ル・サロンから分裂したサロン・ナショナルで活動していた作家たちを中心に結成された会員制の芸術グループです。1900年から1922年まで、パリを代表するジョルジュ・ブ

ティ画廊やデュラン=リュエル画廊で展覧会を開催していました。会員の多くが万国博覧会で賞を獲得し、サロン・ナショナルやサロン・ドートンヌの創設に関わったウジェーヌ・カリエールや彫刻家のオーギュスト・ロダン、日本の画家と親しく交流し、彼らに影響をあたえたエドモン・アマン=ジャン、後にフランス学士院のトップに就任したアンリ・ル・シダネル、近年再評価がいちじるしいアンリ・マルタン、ベルギーの印象派ともいえる「リュニスム」を提唱し、多くの若い芸術家を牽引したエミール・クラウスなども含まれていました。見たままに描きながらも自然や事物に潜む詩情を表現した彼らの作品は、商業的にも批評的にも成功を得、20世紀初頭におけるフランス美術界の一端を担っていました。

本展覧会では、ソシエテ・ヌーヴェルに所属していた画家23名と、彼らの作品83点を



エミール・クラウス 《リス川の夕陽》
 1911年 油彩・キャンヴァス 個人蔵
 協力: パトリック・ドロン画廊 Photo©Galerie Patrick Derom

展示、フォーヴィズムやキュビズムといったモダニズムの影に隠れてしまった画家たちと、その作品を紹介しました。

【展覧会データ】
 展覧会名 | もうひとつの輝き 最後の印象派
 1900-20's Paris
 会 期 | 2015年9月5日(土)～11月8日(日)
 主 催 | 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 朝日新聞社
 協 賛 | 損保ジャパン日本興亜
 後 援 | 在日フランス大使館/アンスティチュフランセ日本
 協 力 | 日本航空
 企画協力 | (株) プレーントラスト

「対話による美術鑑賞教育」支援活動



新宿区教育委員会、公益財団法人新宿未来創造財団と当館の3者協働事業として新宿区立小中学校「図工・美術」の授業支援活動がスタートして8年目を迎えました。年間では小学校29校・中学校7校が参加。これまでの累計鑑賞会参加人数は小学校約9,700名・中学校約4,000名、合計約13,700名です。

最初の年に美術館へ来た中学1年生は成人したことになります。

当館での美術鑑賞の経験が、大人の仲間入りをした彼らの記憶に残り、そして自信となり、「生きる力」の一助になっていることを信じ、これからも活動の充実を図っていきたいと思います。

更にボランティアガイドスタッフの「作品から見たもの・感じたこと・思ったことを引き出す」という小中学校への授業支援で得た豊富な経験を生かし、2011年度から、大人から子どもまで参加可能な「対話による美術鑑賞会『ギャラリー★で★トーク・アート』」を開催し人気を博しています。参加は展覧会ちらしやホームページ、館内掲示板から募ります。展覧会ごとに休館日に行うイベントですから、展示室内は参加者だけです。数名のグループごとにガイドスタッフ2名が付き、ゆったりとした雰囲気の中、じっくりと作品と向き合う時間を味わうことが出来ます。一人での鑑賞とは違い、同じグループの参加者との対話によって、自分の鑑賞が広がる瞬間を実感できることでしょう。参加者からは「作品から受ける印象は人により違い、そうか…なるほど…と自由な発想で鑑賞できた。」「少人数での鑑賞は作品の視点を多方面から感じることでできても良かった。」「作品を深く鑑賞するきっかけになり楽しい体験ができた。」「子どもの視点と大

人の視点の違いの両方を感じ取ることができて大変有意義な時間を過ごすことができた。」などの感想をいただいています。最近では募集人数(20名程度)を大幅に上回る応募があり、また、毎回のように参加する方も増えています。

近年、あちこちの美術館で「対話による美術鑑賞」を取り入れた教育普及活動が行われています。この活動によって、子どもたちの鑑賞力が深くなり、作品制作での表現力にも繋がって欲しいと願うとともに、大人にも子どもと同じ体験を味わいながら「対話による美術鑑賞」の良さを理解し、開館中の美術館で大人と子どもと一緒に作品から感じたことを語り合っている場面に出会える日が訪れることを待ち望みます。

